［フェリス女学院大学］

地域の課題解決に取り組む「プロジェクト演習」がスタート

佐藤 輝●フェリス女学院大学国際交流学部教授

1 プロジェクト演習の位置付けと地域活性化

フェリス女学院大学では、伝統あるリベラル・アーツ教育を新しい時代の実践型教養教育として展開する全学教養教育機構（CLA：Center for the Liberal Arts）を2017年4月に開設した。CLAの中に、2020年の学院150周年に向けて「新しい時代を切り拓く女性の育成」を具現化する一翼としてFERRIS+（フェリスプラス）実践教養探究課程が設けられた。文学部、国際交流学部、音楽学部のそれぞれの学部教育と並行して、いま社会で求められる教養を体系的、主体的に学ぶ学生のための独自のプログラムである。

この課程を修了するために必須なのが、プロジェクト演習と呼ばれる課題解決型授業（PBL）のゼミ履修である。2年次に、課程履修生は四つの当該科目の中から一つを選択することになる。筆者の創設した科目が、横浜の水源地である山梨県道志村（どうしむら）の地域活性化を目指す「ボランティアと地球」である。このほかにも、横浜を音楽で盛り上げるイベントの企画・開催や、和歌の魅力を現代によみがえらせる和菓子の開発、学院150年史の編集・出版への参画という各科目のテーマの下、さまざまな企業や行政機関と本学とが協定を結び、学生の創造力、実行力、協働力を伸ばす授業が共同で展開されている。

2 体験的な学びのプロセスと連携先からの評価

受講生15名は、道志村の魅力を発信したり、さまざまな行政課題の解決を考えたりすることを目標に、2018年5月には道志川の源流域や観光スポットをはじめ、「道の駅どうし」や村内の小中学校などを視察した。7月には学生の視点で考えたイベントの企画案や商品開発のアイデアを5グループが発表した。授業最終回の表彰式では、

道志村賞…「道志村に女子大生を呼ぼう！～SNS映えするキャンプ場～」

水道局賞…「道志村に行こう！　大学生のためのオリエンテーリングツアー」

フェリス賞…「水出しコーヒーメニューの提案」

が選ばれ、審査員（道志村ふるさと振興課、横浜市水道局、および筆者）のコメントもフィードバックされた。その後も、実際に村の観光施設に学生の意見を反映させられるよう話し合いが続けられたり、横浜市内の大学生18名の参加による前述のツアーを開催するなど、当初の目標に向けて着実に成果を上げることができた。

横浜市水道局からは「従来はアプローチできなかった若者に対して、水道事業や水源林の重要性を伝えることができた」、また道志村役場からは「観光客増加につながる意外なヒントを大学生と共有することができた」と、高く評価された。本学は、エコキャンパス活動を通じて２００５年頃から浄水場見学、マイボトル・キャンペーン実施、水道研究コンテスト出場などによって同局との信頼関係を築いてきたが、今回の授業では他大学にも適用できそうなモデルケースを創ることができたと総括した。

「道の駅どうし」で足湯を体験し、村の魅力を学ぶ受講生。

３　学習の成果をふまえた今後の展望

受講生の最終レポートでは、「この授業を履修するまで、自分たちで企画を考えて実現する機会はありませんでしたが、横浜市水道局と道志村役場の方々、また先生が温かく見守ってくださり、話を真剣に聞いていただける学習環境がとてもうれしかったです。積極的に行動・発信していくことの大切さを学び、また自分の意見を言えるように成長できて、自信につながりました」といった、充実感あふれる感想がいくつも見られた。

他のプロジェクト演習科目では、開発商品の完売やマスコミの取材が相次ぎ、地域での反響の大きさを物語っていた。こうした連携の一層の充実は、本学にとって重要な指標の一つである卒業生対象アンケート調査結果の「大学への満足度92％（２０１７年度）」のさらなる向上にもつながるものと確信する。また、若輩者の筆者にとっても、ＰＢＬの実践経験や地元志向の教育・研究の研鑽を積むことができ、教員としての幸福度がアップしたと実感している。

［神戸女学院大学］

地域創りリーダー養成プログラム

小林　哲郎●神戸女学院大学人間科学部教授

神戸女学院大学には、2年次後期から4年次前期にわたり、指定された授業を履修する「地域創りリーダー養成プログラム」がある。本プログラムは地域社会で活躍できる女性リーダーを養成する目的で作られたものであり、文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）2007～2009年度に採択された「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成～西宮市・同窓会・NPO法人と連携した実践的人づくり～」の実践である。人間科学部の一コースとして始まり、2011年度に全学生を対象とする副専攻プログラムになった。まず志望理由書を提出させて意欲のある学生を30名前後選抜し、2年次後期から受講する。2年次では「地域活性化論」と「NPOマネジメント論」を学び、地域の実情や課題、地域のリーダーとなって実践活動をするための方法論について学ぶ。3年次では、興味の近い者同士で4、5グループの班を作り、「地域活性化総合実習」で1年間かけて、地域住民を主役として地域社会が活性化するようなイベントを班ごとに企画、開催する。そして4年次では、「プレゼンテーション演習」でプレゼンテーションを学び、イベントの企画過程や準備、実際のイベントの様子、あるいはそれらの実体験から学び、考えたことや今後の課題を公開でプレゼンテーションする。4科目10単位を修得した学生には修了証が発行される。

活動内容は年度ごとに多少変わるが、例えば2018年度は畑で野菜などを育て、親子で収穫し調理して食べる「農地班」。防災に関するものをキャラクター化した「防災ウォッチ」を使ったゲームや劇などを子どもたちと楽しみながら、防災教育をする「防災班」。大学の地元である門戸厄神（もんどやくじん）駅周辺の店舗や商品を紹介するMAPを作り、パンやカレーなどを学内で販売した「門戸班」。西宮市からの依頼もあって、少子高齢化の進む西宮浜の活性化に取り組んだ「西宮浜班」。高齢化の進む、本学近くの岡田山住宅の集会所で、自治会や社会福祉協議会の支援を受けながらイベントを続けた「福祉班」の五つの班が

それぞれ数回のイベントを企画、実施し、それぞれが地域住民の方たちに好評であった。また、2016年には、兵庫県が主催する「ぼうさい甲子園」で「防災ウォッチ」の企画が大学生部門の奨励賞をいただき、翌年から名古屋市港防災センターから招待されて防災劇を上演したり、地元西宮では小学校などで年に数校、防災ゲームや劇を行うなど、定着し広がりを見せるイベントもある。

3年次の「地域活性化総合実習」では、班ごとに今までのイベントの流れに自分たちの工夫や改良を加え、あるいは、新たな地域や対象に向けたイベントを企画し実施するために個々の発想やチーム力、および準備が必要となる。授業助手や教員もサポートするが、地域の人たちとの交流や試行錯誤によって得られる貴重な経験も多く、充実したものになっている。その経験を、4年次の「プレゼンテーション演習」で多くの人たちにうまく伝える方法を学び、公開発表するという流れは学生たちにも好評であり、授業構成としても適切であるといえよう。

修了した学生からは、「何でもやってみようという積極性や自主性が身に付いた」「仲間とイベントをやり遂げた達成感がある」など、プログラムの教育的効果を確認できるコメントが数多く寄せられており、この授業を受けるために本学を受験したという学生もいた。

最後に、地元西宮市（教育委員会、社会福祉協議会等）、LEAF（NPO法人こども環境活動支援協会）、本学同窓会、各地域の自治会、商店会、NPOなど、さまざまな組織や個人の方々のご厚意やご協力に支えられてプログラムが継続できていることに感謝の意を表したい。

［天理大学］

天理発祥の刀根早生柿を南海難波駅で販売

岡田　龍樹●天理大学副学長

1　刀根早生柿のブランディング

2018年10月5日(金)～7日(日)の3日間、春学期の授業「キャリアデザイン3」の受講者たちが、南海難波駅の特設売り場で天理産の刀根早生柿を販売した。

刀根早生柿は、天理市萱生町発祥の平核無柿の枝変わり種である。「柿食えば……」の句でも知られるように、奈良県は柿の生産地であり、天理市も県内で2番目に生産量が多い。しかし、柿はあまりにも身近であるために、刀根早生柿という品種自体が市民にもあまり知られていない。

そこで地元産品のブランディングに取り組んだ。

本学では、全学共通の総合教育科目としてキャリア科目群が設置されている。選択科目の「キャリアデザイン3」は〝地域との連携〟という視点からキャリアを考えるものであり、2018年度から農業を取り上げている。

農学部のない天理大学では、学生にとって農業は身近な存在ではない。しかし、生命維持の根幹ともいえる「食」に関わり、自然に密着した農業生産労働について、少なからぬ若者が関心を持っている。一方、わが国の農業は、耕作放棄地が増え続け、後継者がいない産業となっている。天理市においても、耕作放棄地は15％に上る。

農業を職業ととらえ、地元の農業の実情を把握するとともに、株式会社やNPOにおける新しい農業事業の動向を取り上げ、農業労働への参入（就農）について学ぶというのが授業の趣旨である。

農業を自分が取り組む仕事と考えることによって、生産物のブランド化が課題として浮かび上がり、大都市大阪での販売へと展開したのだ。

2　多様な連携による運営

授業では、天理市農林課の協力を得て、市内の農業の現状について説明を受け、地元の柿生産者とつないでも

らい、大学近くの柿畑を訪問し、摘果作業を見学した。農家の抱える課題を、現地で直接聞くこともできた。

また、農業法人㈱泉州アグリを起業した本学卒業生を招いて、企業として取り組む都市型農業の実際を学び、泉佐野市の本社事務所を訪問し、収穫作業も体験した。南海電鉄難波駅2階中央改札前特設売り場も、泉州アグリの仲介によって大学が契約した。南海商事にとって、学校との契約は初めてということであった。

授業の履修者を中心に5名の学生が販売に参加し、本学が連携協定を結んでいる㈱モンベルのファームウェア（エプロンと帽子）をユニフォームとして着用した。

販売当日は、柿を仕入れた農家と天理市農林課が応援にかけつけ、市の広報と新聞社からも取材を受けて記事となった。

3　取り組みの成果

3日間で合計約1000個の刀根早生柿を販売した。柿の大きさや品質に応じて、1個280円から3個400円の価格帯と、市場価格よりも高く設定した。一方、仕入れた柿を売り切ることも課題として共有し、学生は〝ブランド〟の確立と商売の生々しさを泉州アグリから教えられた。

農業の現状について学び考えるということは、ほとんどの学生にとって初めての経験であった。地方の課題である高齢化と人口減少は、地場産業の農業を直撃している。そんな現実を学生は多角的に学び、大学キャンパスのすぐ近くにある農地が、いままさに耕作放棄地になろうとしている現実を前に、就農という視点から、大学として何ができるのかを考えた。収益を上げる農業のあり方について学んだことは、キャリアデザインの授業の端緒として一歩踏み出せたように思っている。

この授業は、本年度も継続して行う。